



## さが 性としての真実

Truth as real nature

武田 信生  
Nobuo Takeda

EICA 名誉会員・京都大学名誉教授

「今日はちょっと帰りが遅くなるので、ごはん炊いていてネ。」久しぶりのクラス会だからといっていそいそと出掛けて行く妻にいわれて、僕は「ああ。」と生ぬるい返事をした。多分、どこかのホテルのランチバイキングにでも行って、気の合ったもの同志で賑やかに過ごすのであろう。子育てはとっくのむかしに終わり、孫育てからもほぼ解放された気楽さからか、妻の外出は珍しくもなくなったこの頃である。

テレビのプロ野球番組を観おわった僕は、ごはんを炊こうと思って台所に立ってハタと困った。「ごはんってどうやって炊くんだらう。先ず、ごはんを洗うのか。洗ったごはんにどれくらいの水を加えるのか。炊飯器に刻まれている白米の線にしたがうのか。それともおかゆの線だらうか。」「米を洗って炊くことはしょっちゅうやってきたことだから何ともないことなのだが。」待てよ、彼女は米を炊いてごはんにすることを僕に命じたのか。なんだ。

面白いほど沢山の矛盾が頭に浮かんで来て、米を洗うどころではなくなった。

「お湯を沸かす」；湯を沸かしてどうする気だ？

「寿司をにぎる。」；寿司をにぎったら何ができあがるのか？

うちで飼っている猫は、野良猫が農協の倉庫で生んだ仔を貰って来て以来、豆アジを炭火で焼いて食べさせてきた。この仔にとって食べる物とはすなわち豆アジなので、それ以外は絶対にといいいかに食べないのだ。最近やっとマグロ+カツオの猫缶なら何とか食べてくれるようになったところだ。それでも、缶詰よりは豆アジの方が好みのようなから、海の時化などで豆アジが手に入らない時以外は豆アジである。つまり、この仔はアジで大きくなり、成猫になった今は豆アジでその身体を維持しているのである。つまり、身体じゅうがアジなのだ。ということは、いま僕の横を歩いていった猫は実はアジなのだ!? 生まれたての頃は猫だったはずだが、今は当時の何十倍の大きさに育っており、その拡大した(あるいは膨張した)部分はアジから成り立っているのであるから、アジと呼んで何の不思議があ

ろうか? 彼女は四足で歩いているアジなのである!? しかし、近所の人たちも子供や孫たちもみんな、これは猫であると認識してしまっている。僕一人がアジだ、アジだと強弁を続ければ、間違いなく「とうとう気がふれたみたい。可哀そうに」というに違いない。したがって、あまり大っぴらにいうわけにはいかない。「どうすればいいんだ。」やっぱり猫であると認めたとして、どのあたりでアジが猫に変わるのだろうか。豆アジが口や食道、あるいは胃にある間はアジとっていいはずである。ある程度形も匂いもまだアジの面影を残しているはずだから、「これはアジだ!」と叫んでも狂人扱いは受けないだろう。でもアジが猫の血肉になった段階で「これはアジだ、アジだったはずだ!」と叫ぶことは危険だ。ということは胃~血肉の間くらいにその境目があるようだ。今度、動物学者のA先生に尋ねてみよう。いや、哲学者のB先生にきいた方がいいのかな。

馬鹿なことに拘っていたら、先年かじった『涅槃経』の一節を思い出した。「例えばマンゴー樹の種から芽が出て、成長し花が咲いて実がなるまで常に変化しているからこれは無常である。しかし果実が実って人の役に立つ時、初めて人間はそれを「マンゴー」と呼んで他と区別する。だからと言って「マンゴー」という不変の実体が有るわけでもない(=無常)。だから無常のマンゴーにおいて常にマンゴーであるという不変の真実も成り立っているのである。これが「性としての真実」ということである。」(鳥喩品) 分かりにくいけど、ここでは「マンゴーの実を買ってきて、包丁で切り分けてお皿に盛っても、やっぱりマンゴーはマンゴーだ」というくらいに気楽に考えておかないと、いよいよおかしくなりそうだ。

最近、このようなくだらない屁理屈のようなことを議論することが少なくなってしまったように思いませんか。経済力や技術力の減退はそんなことが原因ではないかと思えます。つまり想像力が豊かでなくなったことが。